

注目!

中日新聞はじめ、数々のマスコミで取材

第5回 介護セミナー

～チームサポートで病

気でも生き生きと。夢や希望・やりがいを持って～

講演 「人生を生かす医療・介護」



船木良真 氏

(医療法人三つ葉在宅クリニック理事長)

三つ葉在宅クリニックでは、大きな古い民家を改造して、24 時間対応をチームで行い、国の医療費削減のための在宅ではなく、『社会保障として位置づけて、在宅医療の現場から社会変革をしよう』と、利用者・家族主体の活動を活発に実践されています。

高齢者・家族が病気や障がいを抱えながらも、その人らしく生きていけるよう私たちがどう関わっていけばいいのか、これからの介護はどうあるべきなのか、お話をさせていただきます。施設・在宅、医療現場ではたらく大勢の方に参加をしていただきたいと思います。

*午後からは各施設・事業所別に情報交換・互いの工夫や実践例を学び合う交流会を企画しています。

■分科会■

- ①特養 ②老健 ③療養型 ④グループホーム・宅老所 ⑤デイサービス
⑥訪問看護 ⑦ホームヘルパーを予定 (参加状況によって変わることもあります)

とき 2007年10月28日(日)

午前10時～午後4時まで (受付開始 9時30分～)

ところ 午前 金山労働会館東館ホール 午後 金山労働会館本館 2F

金山総合駅北側出口から徒歩10分 イオン熱田北側
名古屋市熱田区沢下町9-3



資料代 500円 *昼食は1人、1000円で注文を受け付けます。

<参加申込み方法> 定員150名までで順次受付、定員いっぱいまで切とします。参加受付のご連絡は、定員外になった方のみとさせていただきます。不明な点は、下記にお問い合わせ下さい。

- ①名前 ②施設名 ③職種 ④電話・FAX番号・メールアドレスなど連絡先
⑤弁当の有無 ⑥希望分科会名 を明記の上、FAXまたはメールでご連絡下さい。

主催・連絡先 愛知県医療介護福祉労働組合連合会 (愛知県医労連)

連絡先:名古屋熱田区沢下町9-3 労働会館本館403

FAX: 052-883-6956 電話: 052-883-6955

E-mail irouren@roren.net URL <http://www.aichi-irouren/>



県内版

24時間対応チームで実現

病院にいた時より表情が柔らかい。部屋に吹き込む春風にはおそなでられるベッド上の母を見ながら、長女の武藤照美さん(55)は在宅にしてよかった、と思う。

名古屋市内南区のマンションの一角。直腸がん末期で寝たきりの節子さん(55)を、三つ葉在宅クリニック(同市昭和区)の松本良真医師(60)が診察していた。床ずれの治療をした後、パソコンを広げて電子カルテを打ち始

めた。「本人が医師に、病院は嫌だ、やっぱり家がいいと言っただけです。在宅は大変だからと病院は転院を勧めましたが、母の気持ちを大切にしたい」と照美さんは話す。

三つ葉在宅クリニックは大きな古い民家を改造した建物。「国は医療費削減のために在宅を推進しているが、私たちは社会保険としてやろう。在宅医療から医療、社会変

和らげる

～3～

診察する松本良真医師と様子を見守る植村真美さん＝名古屋市緑区で



在宅医療2

延命問題 重い責任も

名古屋大付属病院の看護師長植村真美さん(60)も、同市緑区の自宅で父敏弘さん(72)を松本医師に診てもらっている。二ヶ月下旬に胃がんと分かり、緊急入院。「あと二、三ヶ月。治療は何もできない」と言われた。何も分かっていなかった。入院中、栄養液をカテーテルで太い血管に投与する中心静脈栄養のほか、胃の出血があるため、輸血も受けた。

自宅に帰ったのは、敏弘さんの強い希望だった。末期での輸血は一種の延命治療だ。「もう父

延命するかしないか早く決定するよつ、病院側が家族に迫る場面にも何度も立ち会った。が、実の父の在宅医療に出くわし、二「こんなに重いものを背負うのかと実感した。患者に迫っていた自分は、責任を分担してもらった」と話す。「医師にも責任を分担してもらった」とも、重荷が減った」とも加えた。

病院を出た後、延命治療をどうするのか。重い判断の責任の一端が、在宅医療を担う医師に降り

〈提出物〉私 あした先生に渡す物、何と何だったか？
子 ええっと、お手紙と…笑顔！
はらうち・こうせい(4歳) 私が僕のか、分かんなくなっ

私 知立市、母・原口恵子 ちゃっちゃん さよう・かつや(5歳) 〓 お小遣い、銀行に預け 知多市、母・佐藤典子 〓 返してもらおうとき、ど 子 あゆちゃん、大人にな

私 何で 子 (私の顔を手で触りながら) こんなふうに、しわが

かわべ・あゆり(5歳) 〓 世界の子もたちが

子どもら20人 防災学び合う 美浜で世界会議

約五十カ所の訪問看護ステーションと連携しており、患者情報を共有するため、独自の電子カルテシステムも開発した。

患者のうち末期がんが三分の一を占め、これまでに百人をみとったという。「家族と一体になってみとりを達成する」というプロジェクトは、やりがいにも満ちている。だから、うちのスタッフはみんな笑顔です。

だが、当初は在宅を避